



http://www.minamih.net/
14・3・22 (土)
南NEWS NO88

明日23日は南の卒業式

Jrユースの3年生は16人、小学校6年生男子が15人、少女が7人卒業します。

文化大で10:00~15:00の予定で行います。

- 集合 10:00
- 昼食 12:00
- セレモニー 13:00
- 解散 15:00



※セレモニーでは全員で卒業生を祝福してください。

・卒業生との思い出のゲームをします。運動のできる靴・服装で参加してください。卒業生とコーチのPK対決もあります。

・カレーライスを5年生以下のお家の皆さんが作ってくださいます。お皿とスプーンを持参してくださいね。コーチのみなさんもよろしく願いいたします。

学校と同じで南の主演は子ども達です。サッカーの主人公は子ども達です。

南では子ども達がどんなサッカーをめざすかを決めて、自分達でめあてをつくりその達成をめざしていきます。サッカーの三間：仲間・空間・時間を大切にしながら、学び合い、育ち合いをめざしているのです。

以下の文章は、卒業の日に改めて読んでいただきたいと思い、再掲いたしました。

「なぜ日本の若者は自立できないのか」 岡田 尊司著 小学館
第6章 この国の再生は教育から p222~223より

虐待やいじめの増加や冷酷な犯罪に象徴される、人と人との絆の希薄化したこの国の殺伐とした状況は、共感性の低下と大いに関係している。共感性を育てることが、社会のぬくもりや絆を回復させることにつながるのである。

共感性を育む上では、家庭での養育や体験も重要であるが、学校でのネガティブな体験や利己的な風潮がそれを損なってしまう場合も少なくない。共感性を破壊してしまう一因となっているのが、過酷すぎる受験戦争や点数主義である。その意味でこの何十年かの受験戦争にさらされた世代は、自己愛的で、利己的で、共感性の乏しい世代に育てられてしまったとも言える。その結果、社会全体の共感性が低下し、相互扶助精神が失われ、殺伐とした現実を生み出すのにも一役買ってしまったのだ。

そこを子どもの世代から変えていかなければならない。とうの昔に大人になってしまっている世代は仕方がないとしても、新しい世代を守っていく必要がある。そうすれば自己愛的な世代の連鎖は防げるだろう。

小学校低学年の早い段階から、グループ内で助け合い、教え合うことが自然に身につくようにすれば、共感性や社会的スキルも自然に身につく。それは、彼らが大人になったとき、共感性の高い、相互扶助精神に満ちた世代を作り出すことであり、社会に希望と幸福をもたらすだろう。フィンランドのグループ学習の成功は、学力だけでなく、共感性や社会的スキルを養うのにも非常に有効なこ

とを示した。

社会の崩壊を食い止め、これ以上荒んだ社会に陥っていくのをとどめるためには、この共感性の部分から子どもの頃から意識して育てていく必要があるのだ。それが弱っているため、自己愛のために、自分の子どもを殺すということも起きてしまうのである。

○『脳内汚染』の著者で、一昨年、抜粋を皆さんに紹介した岡田氏の最新の著作です。購入して一気に読みました。頷けることが多く大変勉強になりました。

他の国の教育等と比べた日本の現状を知ることでお子さんのためにもなると思います。ぜひ、読んでみてください。

ドクイヤーや傍線がたくさん引いてあって読みずらいかもしれませんが、お貸しいたします。 矢上



福島・飯舘村の子ども達に会ってきます

忘れて欲しくないとの痛切な東北・福島の皆さんの声が聞こえてくる昨今です。それでも少なからぬ支援と励ましの声が、世界中から日本中から、大震災・津波・原発の被災者の皆様方に“一人じゃないよ”との声が寄せられ、人間っていいなと思わせてくれています。

私の仲間達との訪問も6回目になりますが、この春休みの3月26日・27日と福島県飯舘村の避難先に訪問し、学童の子ども達・幼児預かり所の子ども達と交流してきます。

南の支援のTシャツを着て、ギターとパネルシアター・漢字部首カルタ・絵本等を持っていきます。みなさんから預かりした義援金を飯舘村教育委員会の教育長さんにお渡ししてきます。

春休みは現役の先生方は忙しいので、今回は妻と二人で行ってきます。

今、原発再稼働・輸出とひた走る日本のリーダーがいます。福島原発被災者の一人、小学生・富塚悠史君の言葉(以下に掲載)を反芻しながらの福島行きです。

「国の偉い人に言いたいです。大切なのは、僕たちの命ですか、それともお金ですか。僕は病気になりたくはありません。僕には将来の夢があります。科学者などの専門家になって環境に優しいエネルギーの開発や何か人の役に立つ仕事をしたいです。その夢を叶えるため、僕は健康に暮らしたい。絶対に死にたくありません。みなさん、子どもたちも原発はいらないと思います」

福島県郡山市に仕事のある父を残し、母と二人で横浜市に避難している。地元の学校では多くの同級生が転校した。「僕たちを苦しめる原発はいらない」という。

悠史君にはたくさんの疑問がある。食べ物の「放射性物質の基準値超え」はどれぐらい危険なの？事故が起きたのに、どうしてまだ原発を輸出しようとするの？……「なんとなく怖い、って気持ちだけじゃ、きっと脱原発運動は流行みたいにならないう。放射線の影響を受けやすいのは子ども。僕らに分かるように教えてほしいし、それを伝えていきたい」。

2012・1・15朝日新聞 朝刊より
by 南のアンパンマン

